

日本文学研究入門

新 版

成 瀨 正 勝
市 古 貞 次 編

東京大学出版会

日本文学研究入門（新版）

1965 年 6 月 10 日 初版

検印廃止

定 価 780 円*

© 編 者

なる せ まき かづ
成 瀬 正 勝
いち こ てい じ
市 古 貞 次

発行者 神 立 誠

発 行 所 財団法人 東京大学出版会

東京都文京区本郷 東大構内
電話 (811) 8814 振替東京 59964

研究社印刷・新栄社製本
Printed in Japan

序

本書の初版本は昭和三十一年二月に刊行された。それは日本文学研究に志す人々の手引きとして、適当な内容がもられていたせいであろうか、版を重ねて多くの読者に利用せられたのであるが、以来すでに十年を経過した。この間、学界の研究はさらに進展し、その現状に照すとき、在来の内容ではようやく不足不備の点が生ずるに至った。当然、改訂を要する時期が来たのである。

初版当時の本書は、麻生磯次、守随憲治両博士の編になるものであったが、今回の改訂に当って、われわれ兩人にその責務を譲られた。浅学菲才、もとよりその任ではないので固辞したのであったが、ついに両博士の容れられるところとならず、やむなく驚馬に鞭うつこととなった。

しかし幸いに、寄稿せられた諸氏のそれぞれの専門分野に対する心を籠めた労作によって、行きとどいた高度の入門参考の書となったことは、われわれ編者の深く喜びとするところである。

戦後二十年、ようやく敗戦の痛手から立ち上って、物質的には繁栄の道を歩むかに見えるが、精神的な自立性に関しては、はたしていかかであろうか。しかし世界における文化交流の増大に伴い、日本文化への関心は戦前よりもはるかに深くなっている。その一環としての日本文学への注目も、ゆるがせにはできない事実であろう。このように日本文学が、ひとりわれわれの問題でなく、世界

全体の問題となりつつある今日、その研究も広い視野のもとにおいて、新しく開拓せらるべきではないだろうか。この書が、それに寄与することを望んでやまない。

昭和四十年四月

成瀬正勝
市古貞次

目次

総序

説

文学研究の態度および方法について……………三

上代

序説……………三

古事記……………六

日本書紀および古語拾遺……………六

風土記……………七

祝詞・宣命……………七

上代歌謡……………七

中古

和歌	六
漢文学	八
序説	七
和歌	一〇三
歌謡	一一〇
漢文学	一二七
日記と日記文学	一三五
随筆	一四〇
前期の物語	一四六
源氏物語	一五四
後期の物語	一六六
歴史物語	一八三
説話	一八九

中世

序説	一九
物語草子	二〇三
説話	二〇九
軍記物語と歴史文学	二五
日記・紀行・随筆・法語	三三
和歌	三二
連歌	二四三
歌謡	二四八
能・狂言・幸若舞	二五三
漢文学	二六七

近世

序説	二七五
上方の小説	二八一

近

代

江戸の小説	二八七
和歌・歌論	二九九
俳諧・俳論	三〇六
狂歌・川柳	三三八
演劇・歌謡	三三七
国 学	三四〇
漢文学	三四五
序 説	三五二
明治の小説	三六三
大正の小説	三七六
鷗外と漱石	三八七
昭和(戦前)の小説	三九六
戦後文学	四〇四

近代詩	四二
近代短歌	四三
近代俳句	四四
近代戯曲	四三
文学評論	四三
翻訳文学	四六
付録 資料の所在(文庫・図書館)	四七

總

說

文学研究の態度および方法について

一

われわれはただ漫然と生きているわけではない。われわれの生活はつねに計画のある営みでなければならぬと思うのであるが、文学を研究する場合でも同様であろうと思う。研究ということになると、やはり周到な用意と、一貫した態度が必要である。

ところで国文学の現状からいえば、めいめいの研究者が必ずしも方法的に確固とした地盤の上に立脚しているとはいえない。研究はかなり混乱しているような印象をうける。研究にさまざまな方法が採用されることは、もとより望ましいことではあるが、全体として一貫した計画をもたないで、ただいろいろの要素が排列されているというだけでは、真に総合的な研究とはいえない。知識の寄せ集めでは困るのであって、全体に一貫した精神が必要なのである。研究はただ漫然と興味本位に進められるべきものではなく、綿密な計画のもとに実施されたものでなければならぬ。

国文学の研究にしても、ある人は考証的な方面に興味をもち、ある人は注釈とか評釈とかいうような研究に専念している。ある人は伝記的な研究に重点をおき、ある人は歴史的社会的の研究にうちこんでいる。めいめいの研究にはそれぞれ意義があると思うが、しかしどういう態度方法を選ぶにしても、文学の全般的な研究に対する自己の役割をはっきり自覚しなければならないのであって、

独善的な態度や自己陶醉におちいらないように警戒しなければならない。

そこで現在日本文学の研究において、どういう方法が試みられているかを省察し、その上に立つて自分の進むべき方向を決定する必要があるように思う。

二

明治時代になって国文学の研究は長足の進歩をとげたのであるが、明治時代の国文学研究の出発点をなしたものは、いわゆる文献学的な研究である。西洋で発達した文献学フィロロギイに照し合せて、日本文学の学問的性格を明らかにしようとする努力がなされた。明治時代の学者にとっては、未整理のまま受けつがれた文献をいかに整理すべきかということが、何よりも重要な問題であった。

いったい文献学的研究は、国民精神の興隆にともなう盛んになるのが普通であって、その当時であっても、西洋文物流行のいわば反動として高まった国民的自覚のもとに研究が進められるに至ったのである。江戸時代の国学の勃興も同様であって、儒・仏の興隆に刺激された結果ともいえるのである。

したがって文献学的態度にはおのずから熱情的な主張がふくまれ、祖国の古い文献に対する愛着思慕の情がこめられている。西洋でも「文献学フィロロギイと哲学フィロソフイイとは兄弟である」といわれたほどであって、文献学は本来哲学的な色彩を多分にもっていたのである。

しかるに文献学本来の姿とも見られる哲学的思索と芸術的な情熱は、その研究がようやく精密を加え、研究の場面が拡大されるにともない、ようやく影をひそめ、むしろ考証的な方面に重点がお

かれた。その結果、文献学は潑刺とした生氣を失い、技術的な取扱いをもって満足するに至つたのである。

そして一方では歴史的な研究法がこれに結びついて、文献学的歴史的な研究法ともいふべき立場が生じ、文学研究の指導的な位置を確保したのである。文献学的研究は個々の作品に重点をおいたものであり、歴史的な研究法は時間的空間的關係を見ようとしたものであつて、立場を異にするものであるが、この両者が結びつき、西洋においても、十九世紀を通じて、文学研究の王座を占めたのであるが、明治時代の国文学者が採用した研究法も、やはりかような文献学的歴史的な研究ともいふべきものであつた。一方では個々の作品とか作家とかの考証をすると同時に、他方ではそういう作品や作家を時間的空間的に排列するという態度をとつた。それはもとより文学それ自体の展開流動を述べたものではなく、また文学それ自身の純粹な研究ともいへなかつたのである。

しかしながら日本文学の研究も、そういう方面ではすでにかなり精密な研究が遂げられ、残された業績はけつして尠少ではないのである。かような立場をとる文献学者の任務は、第一に定本を整理することである。年代の経過とともに、諸種の原因から発生した多数の異本を整理批判して、原作者の意図にかなうような形に純化する必要があるのである。つぎは作品の成立に関する問題であつて、ある作品がいかなる人の手によつて、いかなる事情の下に、いつ出来上つたかという問題に對する考察である。またある作者の作品といわれる中で、その正經と見なさるべきほどの作であるか、つまり作品の眞偽を調査することも重要な事柄に属する。作者が明らかであつても、合作など場合には、どの場面をどの作者が分担したかという問題があり、作者が数人あると予想されなが

ら、その作者が明瞭でない場合には、いよいよ推定が困難である。こういう問題は、その時代の文献になるべく広く渉り、きわめて慎重綿密な、また無成心な調査を基礎としてかからなければならない。

多くの作品はその原拠として他の作品、または当時の出来事なり伝説なりをもっているのであるが、その原典または原事実が、作者によっていかに取扱われているかということも、研究すべき重要な問題である。また古典を取扱う場合に、語句や語法の拘束をうけることが少なくない。そこでこれに訓詁注釈を加えることも、作品を正當に理解考察するための必要な手段でなければならぬ。総覧・提要・索引の編纂なども一見機械的な観はあるが、これにも種々の方法が可能であり、かつ綿密精確な態度を必要とするのであって、文献学者の仕事の中でも、もっとも謙虚な仕事である。とにかく過去の夥しい文献はほとんど無批判のまま現代に引渡されたのであって、明治以降の敬虔な学者達は、これが調査に没頭し、諸方面から研究を進め、現在日本文学の研究に際して、多くの不自由を感じないくらいに、過去の文献は整理されるに至ったのである。そういう学者達の努力に對しては、十分敬意を払わなければならない。

三

しかし文献学的歴史的研法というのも、やはり時代の産物であつて、西洋の実証主義とか、写実主義とか、相對主義とかいうような思想の傾向と相關連して發達したものである。したがってその研究は理性に偏して、無味乾燥になる惧れを多分にもっていた。ことにその研究が細密を加える

にともない、考証的な要素が不当に高く評価され、研究に生氣を失い、その作業も技術的な価値しかもたないように批判されるに至ったのである。文献学は文学研究の序幕を開くことはできたが、その最後の幕を閉じることができなかったともいわれた。

その研究の結果は、個々の事実があまりに多く提供され、しかも体系なしに羅列されたのであって、材料がただ徒らに集積された感じであつた。つまり部分は部分として明らかにされたけれども、個々の事実の底を流れる精神が閑却された。外面的な事實は整理されたが、その内面にふれることが少なかったのである。部分と全体との関連についてはあまり考えず、また蒐集され整理された材料を組立てて、それを有機化しようという欠点があつた。観察が表面的であつて、作品の紙背に徹して、その奥にかくされた創造的な人間の魂にふれることがないという短所があつた。そこで物の精神に直接触れようとする熱情的な学徒にとっては、かような外面的な事実の穿鑿だけでは満足できないということになったのである。

文献学そのものは無価値なものではなく、むしろ文学研究にとっては基礎的な作業であるが、ただその研究が技術的作業に終始するだけでは物足りないのであつて、それは文献学本来の精神にも反するわけである。そこで機械化された文献学に生命をふきこむ必要があつた。哲学的考察と不可分の関係にあつたその本来の姿がふたたび顧みられるようになり、高次的な意味における文献学的立場が要求されるようになった。しっかりした文献の批判に出発した創造的な研究と、個々の事実を有機化しようとする立場が必要とされたのである。

四

文献学者によつて提供された夥しい材料を、單に材料として受けつぐことは重い負担である。特殊な研究の結果を集成し、素材に魂を吹入れ、新しい評価を加え、体系的な秩序を与えようとする要求は、当然おこつてくるはずである。そこで考証的な立場から一步踏み出して、綜合的・形成的な態度が期待され、そのためには美学とか、哲学とか、社会学とか、歴史学というものが参照されるようになり、日本文学の研究は著しくその視野を拡大したのである。

そこでまず考えられるのは、精神的な考察態度である。文献学者の立場は、どちらかといえば、分析的・実証的であつたのに対して、これはむしろ綜合的・有機的な立場をとらうとする。諸現象の外面的な事実よりも内面的な動きを洞察しようとし、個々の材料に束縛されずに、それに自由な魂を吹き入れようとする。諸種の材料の価値は、精神的な考察の材料として役立つか否かによつて決定されるのである。その研究の任務は、文学作品の思想的な内容を取出すにある。そのためには当然、哲学・倫理・宗教等の諸学科が参照されるであらう。

つぎに文学は環境との關係において考察される。一つの民族はその民族固有の性情と生活様式を有し、特有の歴史を展開させてゆくのであつて、その民族的特性はおのずから文学の上に反映する。そこである人種にはその人種特有の文学がなければならぬという前提の下に、文学の研究は進められる。その場合、当然、人種学や民族学が顧慮され、むしろ民族的・人種的な考察の上に立つて、文学における精神的現象の特質が明らかにされるのである。国民的性情は血縁によつて決定される